様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２３年４月３０日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2011
課題番号：20520112
研究課題名（和文）　土地の記憶の生成・変容過程に関わる芸術の機能の研究

研究課題名（英文）　A Study on the Function of Arts in the Formation and Transformation Processes of the Memory of Places.

研究代表者　渡辺　裕
（WATANABE HIROSHI）
東京大学・大学院人文社会系・教授
研究者番号：８０１６７１６３

研究分野：音楽学、文化資源学
科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：集合的記憶、地域イメージ、芸術、文化資源

１．研究計画の概要

本研究は，土地に関わる記憶が人々のうちに形作られ，維持され，また変容されてゆく過程で芸術がどのように関与し，その際にいかなるメカニズムが作動しているかを解明し，ひいてはそれが人々の共同体意識やアイデンティティ意識の形成へと結びついてゆくあり方を明らかにしようとすることを目指すものである。近年、土地やその歴史に関わる「集合的記憶」のあり方や、それが文化の形成の中で果たす役割がホットなトピックとなっているが、土地を舞台や題材にした文学、絵画、映画、音楽等の芸術はそのような記憶が形成されるにあたって重要な機能を果たしているはずであるにもかかわらず、その包括的な研究はこれまでなされてこなかった。本研究では、とりあえずの研究の手がかりとして、文学散歩や映画のロケ地めぐりといった、作品にゆかりの土地をたずね歩く行為に焦点をあて、作品の内実が現実の土地の表象に重ね合わせられることによって、その表象を重層化させたり変容させたりするメカニズムの解明を目指す。

２．研究の進捗状況

これまでに、北海道小樽市やドイツのベルリンを事例とした実証的研究を通して、小樽の観光化やベルリンにおける「オスタルギー」現象において、映画作品によって提示されるイメージが現実の都市に対する表象の仕方を変え、さらにそれが街づくりや観光政策にも反映する形で現実の都市のあり方に大きな影響を与えてゆく具体的プロセスを一定程度解明できた。また、長崎県の端島（通称軍艦島）を事例とした研究では、場所の表象自体が決して一枚岩的なものではなく、複数の視点、コンテクストからなる多様な表象のせめぎあいや離合集散のプロセスを内包しており、写真や映像といったメディアが、その過程でもやはり大きな影響力を及ぼしたことが明らかとなった。また、これは単一の作品、メディアとの関係だけで議論すべき問題ではなく、文学や音楽なども含めた複数の作品、メディアが関わり合う大きな「場」の全体的なありようを捉えてゆくことが必要であること、その際に、個々の作品や既成のジャンルを出発点とするのではなく、むしろそれらの作品やジャンル自体がその時々の「場」のあり方の中で生成、変容するという視点が必要であることも痛感された。そのためにはすでに一定の方向性をもった「芸術」、「作品」といった概念を前提として議論するのではなく、それらをも含む形でよりゆるやかに全体的な「場」のあり方を捉えるための概念として「文化資源」という概念が有用であるという認識にいたった。宮城県石巻市の北村大沢楽隊を対象とした研究では、これまで都会の大衆芸能としてしかみられてこなかったジンタ、チンドンといったジャンルが農村部では郷土教育のコンテクストなどとも結びつきながら、近代国家の体制下での新たな地域表象の生成に寄与したこと、その過程が「ジンタ」、「チンドン」というジャンルのあり方そのものの変化とも連動していることを明らかにし、その一端に触れることができた。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

計画当初から念頭に置いていた小樽、ベルリンの事例については、順調に研究を進めることができた。また、研究の進捗につれて、端島、石巻などの事例を自然に視野に捉えることができるようになってきたという点でも、順調に進んでいると考えている。しかし、個別事例を積み重ねる点では順調であるとはいえ、それらを統括し、全体としてどのような方向性を打ち出せるかに関しては、まだ十分に煮詰まっているとはいえない。残る１年はその点に精力を注ぐ必要があると考えている。

４．今後の研究の推進方策

上で述べたように、かなり細部に深入りした個別研究の積み重ねで得られた成果をどのような大きなコンセプトのもとに統合してゆくかが課題となる。その方向性を考えるための核となるのが「文化資源」という概念であると考えている。そのあたりについて、さらに根底から検討を加え、急速に進展をみせている「文化資源学」という学問と従来の音楽学、映画研究などの成果を生かしつつどのように接合をはかるかが大きな課題となるだろう。そのためには、最終成果の発表のしかたも重要になる。これまでに得られた成果はもちろん、最終的な研究報告書に反映されることになるが、単に土地の記憶、表象をテーマとした本課題の報告書にとどまることなく、「文化資源学」の基本的な考え方に関しても一石を投じうるような形でまとめたものを、単行本として世に問いたいと考えている。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

1. 渡辺　裕、「ノイズ」言説・再考―ジンタとチンドンをめぐる表象の成立と変容、『文学』、査読無、第 11 巻 6 号、2010、70-87 ページ
2. 渡辺　裕、東ドイツの美しい記憶？：「オスタルギー」の中のベルリン、『アステイオン』、査読無、第 72 号、2010、184-187 ページ
3. WATANABE Hiroshi, Building the Body and Mind of Japanese “Nationals”：Modern History of “Song (shôka)” in Japan, “International Yearbook of Aesthetics”, 査読有, vol.13, 2009, pp.189-208
4. 渡辺　裕、寮歌の「戦後史」、―日本寮歌祭と北大恵迪寮におけるその伝承の文化資源学的考察、『美学芸術学研究』、査読有、第 27 号、2009、57-94 ページ
5. 渡辺　裕、バナナの叩き売りの口上はいかにして「芸術」になったか、『大航海』査読無、第 70 号、2009、86-93 ページ

〔学会発表〕（計１件）

1. 渡辺　裕、日本近代のなかの宝塚歌劇、国際シンポジウム「戦間期（1918-1938）大阪の音楽と近代」、2008 年 12 月 6 日、国際日本文化研究センター

〔図書〕（計２件）

1. 渡辺　裕、中央公論新社、歌う国民―唱歌、校歌、うたごえ、2010、293 ページ
2. 渡辺　裕、春秋社、考える耳再論―音楽は社会を映す、2010、155 ページ

〔その他〕